ダンス指導の問題点を探る

― 10年間の指導経験から ―

金　井　芙三枝

最近，巷では，ダンスブームが起っているというのに，学校ダンスは，つまらない，むずかしいなどと言われ，学生たちに敬遠されているところもある。

日本女子体育大学で，ダンスを専攻していない学生を10年間教えた経験を披露し，御批判を仰ぎたいと思う。

Ⅰ　創作は，土台を骨組みを教える

作品創作は，土台と骨組みが大切である。創作の指導は，大体が出来上ってから，どんな指導をしても，ある程度，見ばえがよくなるくらいで，悪い作品が良い作品に生まれ変るということはない。従って，創作指導は，土台と骨組みの段階でチェックを厳しくしなければならないと考え，指導を行った。

① 面白いテーマをめざす

教えはじめの頃は，特に意図したわけではないが，学部生は，面白い作品を創作すると才能が輝いてみえることに気づいた。5年ぐらい前からは意図的に面白いテーマをめざして創作させるように心掛けた。

創作にとりかかる前に，学生にこんな言葉を与えた。

> 皆さんは舞踊専攻の学生ほどウマくない。そして美しい体形をしている人も少ない。しかし，学部の学生は頭が良いはずだ。是非，面白いダンスを創作してほしい。そうすればヘタでも，太っていても舞踊専攻の学生と対等に勝負できる。対等どころか，むしろぬきん出る。今まで何年か，芸能祭に，皆さんの作品と舞踊専攻生の作品とを並べて出してきたが，毎年，皆さんの面白い作品が学園中の話題になるくらいだ。

少数の学生であるが，この話を素直にとらずに反抗的になることもある。

或る学生は，こんな感想文を寄せている。

> 創作をする時に，何回も案を返されたし，きつい事も言われて悔しかったけれど，やはり先生のおっしゃることはあたっているし，ただのイヤミではなかったのだと，今，思います。

② チェックの方法

数人の任意のグループをつくり，リーダーを決め，創作の相談にとりかかる。そして，

「何をやりたいか」……　テーマ
「どういう風に創るか」……　表現方法
「どんな題にするか」……　タイトル

などがきまったら提出させる。殆んどのグループが，生れて初めて創作をするので，創りはじめれば，すぐ行きづまるようなことを書いてくる。テレビや映画のイメージが多く，ステージや体育館のフロアで発表することが不可能と思われることでも，指摘されるまでは気がつかない。

何度提出しても「良し！」と言われないグループとは，しまいに口論のようになってしまう。しかし，こちらも敗けずにそのイメージの弱点をつき応酬する。

こうした応酬をくり返しているうちに或ることに気づいた。創作のために集まったグループ全員の結束が強くなることである。一般の創作の時間で，グループを組んで創作をはじめると，真剣に創作を考えているのはグループの中の1人か2人で，あとのメンバーはボンヤリと誰かが考えてくれるのを待っていることが多いのだが，今回の場合のように何回も駄目を出されて，リーダーが困り果てると，グループの全員が結束して指導者に立ち向ってくる。これは思わぬ収穫で，このことを，最近は意識的に利用し，故意に斗争意識を煽るような言い方もしている。

面白い作品というものは，ある程度，演劇的な要素を持っていないと観客の理解を得られないが，その場合に，宴会の余興のような作品にならぬように，いちばん警戒する。

運動クラブに入っている学部生は，試合後の打上げの演しものを考えるのと同じ要領で考えてしまうので，ダンスによる表現になり得るかどうかを見きわめて，こういう風にすれば宴会の余興でなくダンス表現になり得る。と思えば「良し！」となる。

こうして，踊りを作りやすい方向にみちびいて，イメージがハッキリしてきた段階で突き放し，自由にさせる。グループの人たちの頭の中に，イメージがハッキリ出来ているかどうかを見きわめるために，こういう方法をとっている。「ちょっと，一挙動でもいいから動いてごらんなさい」と言うのである。イメージが明確であれば，即座に一挙動ぐらいは出てくるものである。

作ろうとしている作品のイメージがハッキリしていれば，動きも作りやすいし，伴奏音楽の選曲も，あまり間違った方向へは行かない。

③ あまり出来上らないうちに下見をする。

イメージがはっきりしていることがわかっても，なお一抹の不安が残る。そこで，時間がある時は，

作品が２割ぐらい出来たところで，ちょっと下見をする。

モチーフを見せてくれるグループもあるし，出だしのところをちょっとみせてくれるグループもある。

それをみて，「本当は何を表現したかったの？その動きではちょっと無理でしょう。」と，もう一回テーマを考えるところにもどらせたり，ダンスになっていないグループには「踊り終って汗びっしょりになるくらいの運動量がないと，見ている方に（踊りを見た！）という快感がわかないから駄目よ」などという風に一グループづつ助言をする。

大体，助言は次の２種類であることが多い。

・テーマを忘れて，ただ何でも思いつくままに動きをつなげている。
・身ぶりだけで話の筋をつくり，踊りになっていない。

④　過去10年間に出来た傑作

学部２年生，短大体育科体育専攻２年生，舞踊専攻２年生に創作をさせて，良い作品を並べて芸能祭で発表するということをはじめたのは昭和53年からである。学部には面白い作品を創らせようと考えて，前述のようなチェックをはじめたのは昭和57年からである。主な傑作をとりあげてみよう。

・昭和57年作「満員電車」

新宿から満員電車の中で苦しみ，千才鳥山でやっと脱出するところまで。数人で満員電車の様子をうまく表現している。

・昭和58年作「ゴキブリ社会」

ゴミなどを入れる黒い大きなポリ袋をうまく身にまとうと，ゴキブリの羽のように見えるが，その衣裳で，人間の社会の出来ごと（子供の教育のあり方）をゴキブリの世界におきかえて風刺したもの。

・昭和59年作「勘忍袋の緒が切れた」

平社員が，ヒステリックに怒る課長ぐらいの人の仕打ちに，たえにたえていた怒りを爆発させる様子の面白さを描く。

・昭和60年作「運生」

運動生理学という，学生にとって難物の科目がある。ベートーベンの運命のジャズアレンジの曲で，勉強のむずかしさを表現する。

・昭和60年作「老人クラブのエアロビ」

老人が若者に敗けずにエアロビクスダンスを踊る滑稽さを出す。

・昭和61年作「ゴキブリのダンスパーティ」

58年の傑作「ゴキブリ社会」の作品の話をしてきかせたところ，その話に触発されて出来た作品である。ゴキブリの紳士が，黒の蝶ネクタイ，黒の燕尾服で，黒のドレスを着た淑女と，大いに気どってダンスを踊る。

・昭和61年作「トクヨ像は幸せ」

二階堂トクヨ（踊り手の１人が扮している）像のまわりで，いろいろなクラブがトレーニングをしている。トクヨ像はほほえみ，うなずきながら見守っているのだが，最後に，クタクタになって倒れてしまった選手にスポーツドリンクを飲ませ，いたわる。

・昭和62年作「白雪姫と７人の教育者」

日女体にはダンスの先生が多く，いろいろなダンスを教えているので，それを風刺している。白雪姫に７人の先生が，つぎつぎに出て来て，違うダンスを教え込もうとする。白雪姫はノイローゼになり変なダンスをはじめる。

・昭和62年作「酔っぱらいダンス」

ダンスのステップの中に，踊り方によっては酔ってフラフラしているようにみえるのがある。それを集めてアレンジし，踊る。

・昭和62年作「AH！オシャカ様」

お寺の小坊主が木魚を叩きながらお経を読んでいる。木魚のリズムがジャズになり，踊り出す。みんなが踊り狂っているとオシャカ様も加わる。しばらくして小坊主は仕事にもどる。しかしオシャカ様は踊り狂っていて，小坊主のヒンシュクをかう。

・昭和62年作「コントラスト」

日女体生のダサイ姿と荒っぽい動作，他の大学生のスマートな姿と，しとやかな動作を対照的に演じ，風刺する。

・昭和63年作「脱走者」

囚人たちが寝ている。ある１人の男が脱走をしようと皆に呼びかける。力持ちの男が鉄柵をねじまげ皆を逃がす。走って走って気がついたら，やはり監獄の中だった。

・昭和63年作「チャップリンの新体操」

数人のチャップリンが山高帽とステッキと雨傘を使ってコミックなガニマタ新体操を披露する。

・昭和63年作「おすもうさんのタンゴ」

ほんとうに肥った扮装をしたおすもうさんが８人ほど登場し，お腹をつき合わせ，お相撲のように組んでタンゴを踊る。

面白い作品というものは，誰にでもわかり，笑って軽い気持でみられるので，世間一般の人はなかなか評価してくれない。重い暗い作品の方が作りやすいのに，何か深みがあるようにみえるから，高く評価されることが多い。しかし実際に面白い作品を創作しようと思って，作り，発表しても，観客に気持よく笑ってもらえるまでには，なかなかならないものだ。以上あげた14作品は，芸能祭で発表した時，みていた先生も学生も大いに笑ってくれた。そしてプロの踊りよりずっと面白いと

いう評判であった。

創作をした学生たちは，こんな感想文を書いている。

☆創作をしてみて，よくあんな作品ができたものだなあと思います（おすもうさんのタンゴ）ああいう作品でも舞踊として通用するのだなあという気持が強いです。高校の時も創作ダンスがあったのですが，うまく作れませんでした。ダンスというのを意識しすぎたため，まったく作れなかったのです。でもアイデアしだいで，いくらでもダンスというものは創作できるのだなあと思いました。

☆創作ダンスでは「チャップリンの新体操」をやりました。題名を決める時点で金井先生からOKをもらえず，とてもくやしく（ゴメンナサイ）思っていました。しかし，結果，とても良い作品に仕上り，芸能祭でまでも発表できたとは最高の喜びでした。

☆創作も，色々テーマによって違うものになり，世界に一つしかないものを見たような気がしました。

Ⅱ　基本の体づくりは流行の曲で

学部生のテクニック指導は，最初の5年間ぐらいは，舞踊専攻生に教えるような，モダンダンスのテクニックを，時間をかけて教えていた。しかし，どうもノリが悪い，ヒザがきれいに伸びない，脚が外に開かない，脚があがらない。

無理をしても学生の劣等感を増すばかりとなるので方法を変えてみた。

体が固いといっても，学部生の固さは，スポーツをしているために筋力のある固さで，ダンスの種類によってはそれが生きてくる。ジャズダンス，エアロビクス，民族舞踊のような力強く野性的なダンスがあるが，これは学部生向きである。特に野外で踊る場合など，その姿をみるとパワフルに光り輝いている。

学部生の体づくりの方法としては，基礎として必要な動きを，今，流行しているディスコの曲に入れて教えることにした。

そして，その一曲の振りを教えながら，体を伸び伸びと大きく動かす。惰性で動かずに精神的なものを先行させて動く，アクセントをはっきり，ツブを立てて……など，必要な要素をとり出して教育するようにした。

学生の感想文によると，

☆エアロビクス的なダンスは，けっこうしんどいものはあるけど，やはり楽しいと思う。もし教師になったり，または教育実習などに行ってダンスをやらなくてはならない時，創作ダンスとかは，あまり好きではない人とかがいるので，こういうものも少しとり入れて，ダンスにもこういう楽しいものもあるということを知ってもらうのも，いいのではないかと思う。

☆エアロビクスダンスは楽しかった。ヘタはヘタなりにできるということが分かってよかった。

☆おしえていただいたダンスも，自分たちの知っている曲だったので楽しくできた。

☆高校までの授業では，このようなダンスはしたことがなかったので，このように，おもいっきり体を動かすダンスはとてもよかったです。

☆私の好きなエアロビクス調のハードな作品をいくつかやれてとても楽しくうれしかったです。クラブで，ウォーミングアップとして活用させていただいています。

☆授業は，体を全部使って動かすから，とても疲れるけど，リズム感やステップが身についたし，何よりも"曲に合わせて創作する"動き"のヒントになったから，きっと教育実習に役立つんじゃないかと思いました。

☆唯一，汗のかける授業でした。

Ⅲ　創作偏重にならぬよう

たとえば音楽の時間に，毎時間，作曲をさせている学校はないと思う。「作曲は，才能がなければ出来ない」と大かたの人が思っている。

ダンスの創作でも，本当は同じで，「創作は才能がなければ出来ない」のである。

しかし学校のダンスでは，創作をさせている。ダンスを習って踊るのは楽しいことである。街のエアロビックダンスや，ジャズダンスのスタジオが満員なのはその証拠である。

歌を習って歌うのは楽しいことである。街のカラオケ道場が流行しているのが，その証拠である。人間のいちばん原始的な行動が，そこにある。

しかし，作曲や，ダンスの創作となると，むずかしくなってくる。学校ダンスの教育が，創作偏重になると，ダンス嫌いの学生が増えてくるのではないかと心配する。

授業の75％ぐらいは，リズムに合わせ一生懸命美しく動けるように，基本の体づくりに励むことをさせてはどうか。技術を教えることは，美を教える第一歩であるし，体の中心から体を動かすことを学べば，心をこめて動くようになるので，より芸術的なダンスに近ずけるのではないかと思う。